

勝沼精藏先生の嘆息 — 杉浦重剛撰文「向阪兌之墓」 —

塩澤全司*, 高橋 昭**

向坂 兌 (1853年4月～1881年6月) は、明治維新に活躍した日本の法曹界の偉人である。28歳で夭逝したため、現在その名を知る人は少ない。向坂は佐野藩に育ち、明治3年に貢進生となり、大学南校に進み、東京開成学校で学び、学力優秀であった。入江陳重、岡村輝彦らとともに、明治9年に第2回文部留学生として英国に留学し、Middle Templeにて法律を学び、明治12年に英国の法廷弁護士・バリスター (barrister) の資格をとる。その後、ヨーロッパ各国を歴訪し、明治14年5月に帰国したが、肺結核のため、同年6月14日に他界した。夭逝を悼む人が多く、顕彰碑が建てられた。これは戦争で戦火に破損されてはいるが、今も龍巖寺に存在する。

向坂 兌の姉は「升」といい、名古屋大学第三代学長勝沼精藏の祖母である。升は、夫・精之允が35歳で自害し、息子・五郎が40歳で遭難死したため、孫の精藏と六郎を養育した。国際的な活躍をし、多くの人々を導いた勝沼精藏は、若くして他界した向坂 兌の遺影を大切にしていた。

1 はじめに

勝沼精藏先生は、明治44年東京帝国大学医科大学を卒業、大正8 (1919) 年に愛知県立医学専門学校内科教授、後に名古屋大学医学部第一内科教授、昭和24年には公選による名大学長となられ、昭和29年に文化勲章を受章され、昭和38年11月10日に名古屋で急逝された。没後36年を迎えることとなる。

精藏先生の肖像画は、山形県上山市の上山城内に飾られている。精藏先生の遺品のいくつかは、同城内の上山市教育委員会に、御息女の嫁した吉村家から寄贈されている。それらのなかに、精藏先生の祖母の弟の向坂 兌氏の英国で撮られた写真と、同氏の帰国後の夭逝を悼んだ南校および東京開成学校同窓生の顕彰碑の拓本の写真がある。肖像画の写真の裏には、精藏先生が書かれたと思われる文章がある。「精藏先生の嘆息」というのは、満28歳で夭逝した、精藏先生の“大叔父” (祖母の弟) に当たる「向坂 兌」氏についての追慕である。

2 勝沼精藏先生の御祖父と御祖母

筆者の一人塩澤は、名大から筑波大学に転じ、さらに山梨医科大学に着任した頃、当時山形大学医学部第一内科教授安井昭二先生 (のち国立名古屋病院院長) から、勝沼精藏先生の御遠祖が山梨県勝沼町に由来することについての調査を依頼された。そこで、現存する資料を収集し、日本医事新報 (3560号①, 3652号②, 3653号③) に報告した。

精藏先生は明治19 (1886) 年神戸で出生された。父は、日本郵船会社に勤める船長勝沼五郎で、明治30年、日清戦争の際、澎湖諸島沖で遭難死した。40歳であった。母は旧姓茂木で、静岡県出身であった。父方の祖父は、勝

沼精之允信紀 (幼名 五郎) で、館林藩下家老 (300石) であった。戊辰の役で意見が対立して館林藩漆山陣屋に蟄居し、幕府側に味方した。味方は敗れ、官軍に追われたため、上山に脱れ、大沼家にいた妻子の面前で明治元年10月25日に自害した。35歳であった。その場所に遊行第57世・他阿上人・一念の書による「南無阿弥陀佛」という墓碑が妻によって建てられた。罪人にされたが故に、当時の世人の目を憚った“戒名のない墓碑”である。

父方の祖母は「升」といい、上山藩の高名な儒学者・五十嵐 (旧姓武田) 于拙の孫で、道歎の長女である。伯母「敬」の嫁した館林藩家老・林庄左衛門成昌 (格斎) (300石) の養女となつて後、安政4年2月晦日に勝沼精之允と結婚し、2子を儲けた。夫の自害の後には、上山での女子教育に専念し、明治8年から上山小学校女子部の主幹を務めた。娘・鉦治 (せいじ) を元三春藩士・湊直江氏に嫁がせた後は、息子五郎と生活を共にし、東京、神戸、函館、新潟に転居した。五郎が遭難した後は、嫁の実家である静岡の茂木家に起居した。嫁の顕子は脊椎カリエスとなり療養生活を送ったため、孫の精藏と六郎は祖母升の手で厳しく養育された。精藏先生のこの間の事情は、桂堂夜話 (昭和30年、黎明書房) ④で述べられている。

祖父・精之允は武士道を貫いた生き方が見事であった。祖母・升は残された孫を立派に育て上げた功績が讃えられている。上山城の精藏先生の笑顔の肖像画をみると、明治時代に生きた祖母の姿が浮かび上がり、気骨ある女性像が彷彿とするのである。

3 「向坂兌君之碑」

吉村家が上山市教育委員会に寄贈した遺品のなかに、「向坂兌君之碑」の写真がある (図1)。鮮明な写真であるので、拓本を写真撮影したものと思われる。この碑文の書き下し文は、昭和2年に刊行された「上山郷土史」 (渋谷光雄著) ⑤の124頁に掲載されている。この訳文には所々に誤りがあると思われるので、修正を加えたものを

*山梨医科大学神経内科

**名古屋大学名誉教授

ここに紹介しておく。

「君の名は兌(なおし)、松嶼(しよ)と號す。本名は五十嵐氏、幼字(あざな)は幡之助、羽前上山藩士也。幼より文事に志し力學人に過ぐ。慶應二年春、下野佐野藩士向坂弘孝君の養子となる。明治三年冬、官、諸藩に命じ、青年書生を大學南校に出し、洋學に従事せしむ。名づけて貢進生となる。大學に入り、刻苦勉強し學業頓(とみ)に進む。七年九月法學本科生となる。九年六月官命を奉じ英國に遊び、専ら刑律を修す。居ること三年、考試せられて英國狀師(注・バリスター(barrister)法廷弁護士)となる。乃(すなわち)、官に請いてさらに白耳義(注・ベルギー)に遊び、後又獨逸(注・ドイツ)、丁抹(注・デンマーク)、瑞典(注・スウェーデン)を歴遊す。其の瑞典に在るや、博士諾丁沙士(注・ダクテイサド=Nordenström)氏の囑に應じ、譯(訳)述する所少なからず。後遂に佛國巴里(注・パリ)に留まる。而して所在講學之餘、親しく法庭(注・廷)に臨み、囹圄(注・れいご=刑務所)を實驗(注・実見)し、經歷頗る多し。十四年五月歸朝す。是より先き君已(すで)に肺病を憂(うれ)え、六月十四日遂に没す。享年二十九。青山原宿村、龍岩寺先塋(えい=祖)の側に葬す。君性にして談論に長じ文章を善くし、英佛兩語に通ず。詩歌俳諧の細に到るまで涉獵せざるはなし。而して孝友愛國の情常に言辭の外に溢る。人為に感動す。嗚呼君の多才此の如し。而して天之に假すに年を以てすれば、則其身を致し、功を邦家に建つるや期して待つ可き也。惜まざる可けんや。十二月諸友相謀り碑を建つ。銘に曰く、山を爲(つく)る九仞(じん)にして、功一簣(き)に虧(か)く、悠々たる蒼天、是果して何の意ぞや(原漢文)。濱尾新(あらた)題額、杉浦重剛(しげたけ)撰文、高橋健三(たけぞう)書、鱸猛鱗刻」

4 向坂 兌の生涯

筆者らの調査した資料と「向坂兌君之碑」などによると、向坂 兌の生涯は凡そ次のようである。

向坂 兌は、嘉永6癸丑(1853)年4月27日(五十嵐家系図による)に、上山藩士五十嵐柔兵衛道敷の三男として生まれた。姉とともに館林藩林庄左衛門成昌(格斎)の養子となった後、慶應2(1866)年3月19日佐野藩向坂弘孝の養子となる。この養子縁組に関しては、向坂弘孝の妻・恵(えい)が館林藩根岸弥源治の娘(後の館林藩家老根岸鉄次郎友行の妹)であったことが関係していると思われる。幡之助を改め、兌といい、諱は弘齋と命名された。藩校観光館に学んだ後、佐野藩の貢進生として大学南校へ入学し、東京開成学校から英国へ派遣され、英国で法廷弁護士となり、ヨーロッパ各国で活躍した。病を得て帰国し、3週間の療養も空しく、明治14(1881)年6月14日に28歳の若さで病没した。その葬儀には、140余名が列席している。龍岩寺に葬られた。その夭逝を惜しむ人が多く、向坂家、旧佐野藩士、そして大学南校および開成学校の同窓生が顕彰碑を当初青山共葬地第1等28に建て、同年12月17日にこれを龍岩寺の向坂家の祖先の墓に移転した。

杉浦重剛は碑文の中で、「天は何年この世に命を与えたのであろうか、帰国後たちまちにして昇天させてしまった。日本国に功績を建てる迄、待つべきであった。惜しんでも余りある。山となるべき長年の努力も、ほんの少しの手違いで灰塵に帰ってしまった。空は常に青く悠々としている。天子様よ、これは一体いかなることでしょうか」と、天を仰いで哀悼している。同僚の死を悼んでの素晴らしい一文といえよう。

また、向坂 兌を哀悼する記事は、明治14年刊の明法志林第13号に「英國狀師故向坂兌氏」として死去を報じ、同誌第14号に「英國狀師故向坂兌君の畧傳」を掲載している。明法志林は、フランスに留学をした明法寮出身の法学者の作った雑誌である。向坂 兌が英国から仏国へ留学先を転じ、パリに長期滞在したためと思われる。その冒頭の部分をここに紹介すると、「英國狀師故向坂兌君ハ前號ニ記セシ如ク多年盤雪ノ功ヲ奏シ歐洲各邦ヲ遊學シ殊ニ刑律ニ心ヲ用キ牢獄事務ヲ實驗センカタメニ各邦ノ實況ヲ目撃シ歸朝ノ上ハ大ニ爲ス所アラント豫望先見サレシカ此事業ヲ奏セス病大ニ漸ミ將ニ鬼籍ニ入ラントセルトキノ心情ハサゾ遺憾ノ事ニソアリシト今ヨリ推考スレハ其心裏痛情ハ鏡ニ掛テ見ルカ如シ其親戚知友ノ方ハ勿論同君ノ言行ヲ聞キ其宿望大志ヲ洞知スルモノハ誰カ之ヲ惜ミ之ヲ悲マサラン文部准奏任御用掛ニテ東京大學法學部ノ教授ヲサル、入江陳重君司法准奏任御用掛岡村輝彦君ハ同君ト同ク歸朝アリ今日其學術ヲ實地ニ施サレタルヲ見テ益々同君ノ死ヲ惜ムノ情ヲ強クセリ... (後略)」⑥。



図1. 「向坂兌君之碑」
明治14年12月に建立された記念碑の拓本
(上山城管理公社蔵)。

なお、向坂 兌の送りがなは、向坂文書ではさきさか(左幾左可)となっている。また、開成学校の試験の成績発表名でも、入江陳重の渡英日記でも、「向坂」とかかれている。しかし、東京開成学校の卒業証書や、バリスター(barrister)登録の氏名ではローマ字でさぎさか(Sagisaka)と書かれている。当初、筆者らは、向坂 兌のエリートとしての表現か、または「大阪」の地名のように「土に返る」という「坂」の字を嫌って「阪」としたように、「向阪」と変名したかとも考えたが、さぎさかは外国人が読み易いのためにやむを得ずそのようなスペルを容認し、「向阪兌之碑」の「阪」は彫刻した人が誤って刻んだためと考えている。

5 貢進生

貢進生とは、明治3年10月に、東京帝国大学の前身である大学南校に各藩から中央集権的国家体制に必要な人材育成のために集められた若者たちである⑦。すなわち、明治政府は明治2年7月に大学校の法制を定め、昌平学校を中心に開成学校・医学校を分局とし、大学校と総称した。同年12月、大学校を大学と改称し、開成学校を大学南校、医学校を大学東校と改称し、大学は、2校と区別して大学本校と通称した。

明治3年2月に政府は大学規則及び中小学規則を制定し、貢進生の導入を唱え、7月27日太政官令により、大藩は3名、中藩は2名、小藩は1名、15歳以上20歳迄(既に大学に入学している者は22歳迄)、秀才で行状正鋪・身体壮健の者を10月迄に選び、5年間の年限で大学南校へ貢進するように各藩に求めた。その結果、全国300余藩より貢進生が集められた。その数は、明治4年1月31日の改正貢進生各簿によると310名に達した。これにより、幕末から維新にかけて、各藩の藩校で優秀な成績を収めていた藩士が東京の大学南校に集められ、エリート教育を受けることとなった。当時として無上の名誉あることと思われる。学費は各藩より支給されたが、優秀者50名は官費生となることができた。この制度は、欧米新進の学問を習得させ、高等教育に近代性格を導入させたことから、新政府の革新的政策の一つとなった。

明治4年7月に文部省が設置され、大学南校は単に南校となった。その後、廃藩置県に伴い、貢進生制度は廃止され、南校も一時閉鎖となった。明治5年8月に学制により南校は第一大学区第一番中学となった。それまでの600名中300名を入学させ、学力の低い貢進生を含めた学生の淘汰を図った。明治6年4月には開成学校となり、学部制を導入した欧米風の大学形態となった。さらに開成学校は、明治10年には文部省布達で「東京大学」に改称されてゆくこととなる。その後、明治19年に、帝国大学令が公布され、「帝国大学」として改組され、明治30年6月22日に京都帝国大学設立のため、「帝国大学」は「東京帝国大学」と改称された。

当時の貢進生の生きがいは、明治7年以後に現れた自由民権運動の思想に共鳴し、官員となり立身出世し、天下に名声を博することを理想とし、「末は博士か大臣か」を唱え、皆参議や郷相となり国政に参加する為に、天下

国家のための学問をしているという自負があった。

向坂 兌は、佐野藩(栃木県)の貢進生として明治3年大学南校へ入学した。明治5年4月の「南校一覧」⑧には、英二之部に向坂 兌(栃木、20歳)と書かれている。因みに、同部に杉浦重剛(滋賀、18歳)、英六之部に高橋健三(印旛、18歳)がいる。当時の校則として、英学部は、1から9まで学級を分け、毎回の試験毎の成績優秀者を進級させていた。英一之部には、小村寿太郎、三浦(鳩山)和夫らがいた。

明治8年2月の「東京開成学校一覧」⑨には、向坂 兌は本科第三級法学にあり、杉浦重剛は本科第三級化学に、高橋健三は予科第一級法学にみられる。

明治9年4月には、本邦最初の学生中心の雑誌と言われる「講学余談」⑩2号が東京開成学校の入江陳重ら法学生より発刊された。そのなかで、向坂 兌は、東京開成学校でのフランス法学士ブスケ(Georges Hilaire Bousquet)やボアソナード(Gustave Emil Boissonade)の講義から得た知識とともに、明治新政府の緊急に行うべき、刑罰の大綱についての提言を行なっている。

明治9年に出された「旧大学生特痴三対表」は、当時の学生のアンケート調査で、1項目に3名ずつ学生名が記載されている。向坂 兌は「勉強家」「家康好」「病院家」「斜視する人」「誰に向かっても貴様と言う人」という項目に名前が記載されている。よく勉強したが、病気がちであったことが伺われる。

6 明治維新の海外留学生

明治政府は、各藩の留学生の海外派遣を重視したため、各藩はこぞって優秀者を留学させた。米国、ドイツ、フランスには弁務使を置き、明治3年より外務省にかわって大学が海外留学生の管理を行なった。明治5年、学制公布とともに、文部省の管轄となり、「海外留学生規則」が定められた。明治6年の調査によれば、海外留学生総数は373名にのぼり、そのうち官選(初等および上等)留学生250名、残りは私願によるものだった。明治維新から明治6、7年頃までの海外留学生は急増したが、そのなかには勉学を放棄し、留学期間を守らず、帰国しない者も増え、国費の浪費を愁う状態となった。明治4年の岩倉使節団も官費留学生の削減、取締り強化を強調した。明治6年には、留学生への学費送金を中止し、官費留学制度を全廃することとなった⑪。

文部省は、官費留学でなく貸費留学生として、新たに学力と品行ともに優秀な者を選択して、専門を法学と理科に限定した文部留学生を送る必要があった。

7 文部留学生

第1回文部留学生は、開成学校の成績と自薦により、明治8年7月10日付で、米国へ9名、フランスへ1名、ドイツへ1名の合計11名の留学生、師範教育伝習のため米国に派遣された他の3名(井沢修二・高嶺秀夫・神津専三郎)、1名の海外留学生監督(目賀田種太郎)の辞令が交付された。このなかには、小村寿太郎、三浦(鳩山)

和夫ら4名の法学関係者がおり、10月17日に北京丸で横浜を出航した。

第2回の文部留學生の選考にあたっては、明治9年4月12日に全国に布告されたが、翌年1月になっても自薦者はなく、結局、再び東京開成学校の成績優秀者から10名が選考された⑫。

すなわち、明治8年7月の法学本科中級評点のうち、心理学・羅甸・憲法・法論・列国公法のテストの平均点で、第1位・入江陳重(96点)、9位・向坂 兌(92点)、14位・岡村輝彦(88点)の順であった。明治9年2月の定期試験成績の結果では、入江95点、岡村92点、向坂88点であった。以上から、法学科では上位3名が選考された。当時は大英帝国の時代であり、米国よりも英国留学の方が名誉とされていた。

明治9年5月16日、東京開成学校において、浜尾 新校長代理と井上良一監事の立合いのもとに、10名に留学派遣の内示があり、6月19日文部省から5年間の留学許可が下りた。すなわち、「法學為修業英國留学可致候事。但留學年数滿五年トス英國到着ノ日ヨリ年限中學資貸渡候事。文部大輔田中不二磨代理文部大丞九鬼隆一」という書状がある。20日と21日に、支度金と旅費が手渡されている。1年間に金貨1000円が貸与され、20年賦で償還するものであった。21日に「中村楼」、鎌倉の河岸の「松彦」、および上野の「松原」で祝賀会があった。23日には、昌平館において送別会があり、留學生の弊害として怠惰とならぬように、誠実に専門科目を勉学して大成するように戒告を受けている。その後、海運橋畔の西洋料理店で祝賀の宴が開かれた。

24日は、午前中に校中会食堂で送別会があり、友人30名余りとともに蒸気機関車で横浜に行き、見送りを受け、アメリカの郵船アラスカ(Alaska)号に乗船した。後から東京開成学校長代理・浜尾 新が、渡航に必要な履歴書を持参し、手渡している。そこには「法學本科中級ニ在リ學業優等ニシテ試験毎ニ高第ニ居レリ其品行端正ナリ仍テ證ス」と書かれている。アラスカ号は、翌6月25日早朝横浜を出航している。第2回文部留學生は、英国留學者7名、仏国留學者2名、これに監督者として正木退蔵がいた。なお、当時東京開成学校長・畠山義成は、兼職も多く、浜尾 新が事実上の責任者であった。また、畠山校長は明治9年4月米国に出張し、その帰途、船中で客死した。

8 入江陳重著の渡英日記より

向坂 兌の渡英中の状況は、入江(後に穂積と改姓)陳重の渡英日記のなかに所々に述べられている⑫。

「六月二十六日 船酔い者が続出し、向坂 兌が最もひどかった。余(入江陳重)は同氏の許に行き、同氏が演劇が頗る好むので、新富座の新劇伊達実録の内浅間局子に別るの幕並びに安芸甲斐対決の場を説話した。

六月二十九日、船中物価の高いことに驚いた。向坂・岡谷(岡村の誤り)両氏が床屋に行き、一円二十五銭も食られた。

七月五日、谷口氏の発議により増田谷口関谷岡頼(岡

村の誤り)及び余は詩歌を始める。同行者のうち詩を能くする者は杉浦氏と向坂氏があり、点作を乞う。」

向坂 兌は、幼時より上山藩にあって祖父五十嵐于拙の儒學者としての學風、文才を引き継いでいたのであろう。

「七月十八日サンフランシスコに到着した。同日はパークホテル(Park Hotel)に宿泊したが、向坂 兌は入江陳重と同室(532号室)に泊まった。」と書かれている。

シティー・オブ・モントリオール(The City of Montreal)号でニューヨークから英国に渡った。ロンドンでは「八月十九日曇。下宿所を探さんと四五軒を問い合わせる。終にホートンブレース(Howtonplace)六番地にあった。向坂氏と岡村氏と余は法學生であるので同家に下宿した。」と書かれている。

渡英1年後、再び入江陳重の日記によると、ロンドンでの生活状況について、「悪空氣黒焼白霧中にありしを以て自然体にも感ぜしか。同航の者一同に活潑神を失いたるが如く、五月末頃よりは頻りに身体に疲労を覚え、久しきに耐えて読書を為し、遠きを忍んで遊歩するの氣力なし。同学向坂岡村も又此の如し。」と書かれている。さらに、ロンドンから海峡島(Channel Islands)・ガーンジー(Guernsey)島に行く旅行を計画し、向坂、岡村、杉浦、入江らは勇躍して8月1日に夏期休暇をとって旅行したことが書かれている。当時は、産業革命の真最中

CERTIFICATE

THE COUNCIL OF LEGAL EDUCATION

Certify that Naoshi Sagisaka
satisfactorily passed an Examination held
at Lincoln's Inn in the 11th Term of
the Legal Year, 1878-9

Dated the 9th day of June 1879

for Master of the Bench
Chairman
Members of the Council

図2. バリスター Barrister の証明書。

(向坂清氏所蔵)。Naoshi Sagisaka, 1878年6月9日と書かれている。

であり、肺結核などの呼吸器疾患が多く、これに煙害による影響が強かったものと思われる。

9 バリスター・アト・ロウ(Barrister at Law)

英国の裁判制度は2元制に分かれており、バリスター (barrister) とソリシター (solicitor) との2種類の弁護士がある。バリスターは英国の法廷弁護権を独占し、上位裁判所の裁判官となり、そのほか、法律相談や助言を行うものである。英国の総合大学で一定の成績を修め、法学の学士を習得したのち、法曹学院 (Inns of Court) で1年間の実務教育課程を終了し、法学教育評議会の行うバリスター最終試験に合格することが必要である。法曹学院は、全国に4ヶ所にあり (Inner Temple, Middle Temple, Lincoln's Inn, Gray's Inn)、岡村輝彦、入江陳重と向坂 兌はミドルテンブル (Middle Temple) に属した。ミドルテンブルでは、各学年を4期に分け、入学生徒は、第9期を経て卒業試験を受け、合格の者は、第12期に至って英国法律学士の免許を得る規則であった。向坂 兌は明治12 (1879) 年6月9日の試験に合格し (図2、図3)、その後、6月28日の英国の法律雑誌The Law Journal 702号に、バリスターの弁護士として6月25日に登録されたことが発表された。すなわち、ミドルテンブル出身者24名中に、「Naoshi Sagisaka, Esq., Nobushige Iriye, Esq., University of Japan. Middle Temple Scholar in Common Law」と掲載された^⑬。同航の岡村輝彦は、その1年後にバリスターに合格した。日本人として英国でバリスターとなったのは、明治10年6月星亨が最初で、ついで、向坂・入江、さらに岡村がこれに続いたことになる。

会頭のブラウンは、ミドルテンブル法学所に於いて卒業の生徒に法律士の位号を付与し、通常の演説を終って後、日本の法学生徒の優秀な学力を賛美した。明治11年の文部省第6年報には、このことはきわめて稀なことで、



図3. 向坂 兌肖像画 (エッチング)。

(向坂清氏所蔵)。バリスター (barrister) 合格記念のものと思われる。白髪と衣のような法衣をまとう。これを「カオン」と呼ぶ。

実に見事といわざるを得ない。彼らがこのように特別の栄誉に浴したことは、今後の大成が期待できる証拠であると述べている。

向坂 兌は、ロンドンでバリスターの資格を得た後、オクスフォード (Oxford) 地区でスチャーフン裁判長の陪席となり、巡回陪審裁判所の裁判官となった。この間、スタッフォード (Stafford) の裁判所で弁護士活動を依頼されたが、その時は刑事裁判の視察を目的としていたので辞退したと文部省へ報告をした。その後、イギリスからベルギーのブリュッセル大学に行き、ドイツでは滞独中の村田保 (注・唐津藩出身。明治4年英国留学、大日本水産会副総裁) とイタリアで開催中の萬國刑法会議に招かれて出席し、次いで、デンマーク、スウェーデンを歴訪し、最後に、パリで裁判と行刑制度を実見した。一方、入江陳重は、英国からドイツに渡り、ドイツの裁判制度を実見した。

因みに、最高裁人事局・河野正道氏の調査によれば1990年の英国のバリスターは約7千人、下級弁護士であるソリシターは約7万人いたという。

10 「法學狀師向坂兌之墓」

このように、英国でバリスター資格を得、ヨーロッパ各地で活躍した向坂 兌は、明治14年5月17日帰国し、間もなく6月14日に逝去した。

戒名は「十洲松嶼居士」で向坂家の墓地である龍岩寺 (現在古碧山龍巖禪寺) に葬られた。龍巖寺は、東京都渋谷区神宮前二丁目3番8号にあり、臨済宗南禅寺派、広月正月住職で、慶長7年の創建である (大日本寺院総覧、名著刊行会、大正15年、による)。龍巖寺のある一帯は、江戸期から明治5年までは、青山原宿町といった。明治5年以後、青山北町5丁目となった (角川日本地名大辞典、昭和53年刊、による)。したがって、この地は、かつては青山ともいわれたものと思われる。

龍巖寺の境内に、「法學狀師向坂兌之墓」という墓碑がある (図4)。その後面の彫文を拓本すると、「兌、實ハ五十嵐柔兵衛之第三子也。慶應二年三月弘孝養イテ子ト為ス。明治三年冬、貢進生ト為リ、大学ニ入り、英学ニ従事ス。九年六月官命ヲ奉ジ航シテ英国ニ赴キ専ラ法学



図4. 龍巖寺境内。左から「法學狀師向坂兌君之墓」、「養父母の墓」、そして戦争による被弾のため破損した「向坂兌君之碑」 (松田仙三氏撮影)

ヲ修ス。業日ニ大イニ進ミ遂ニ法学院卒業シ証記及ビ〇〇(注：法学)学位ヲ得ル。十四年五月歸朝ス。是ヨリ先、肺病ニ罹ル。同年六月十四日ヲ以テ歿ス。享年二十又九。瓊浦吉田晩稼書「高松齡刻。」と書いてある。その香華台の銘文には、次の旧佐野藩士12名の氏名が刻まれている。嶋田脩治、福原角次、今井金平、竹村亘、山田歸一、佐藤確郎、佐藤勉次郎、福永定、早川義太郎、福原全治、關谷幸蔵、須永喜三郎。以上から、この墓碑は旧佐野藩士が、向坂弘孝に協力して作られたものと思われる。

なお、佐野市の郷土博物館の石田正己氏の調査によれば、向坂氏は、佐野藩の元治元年の中村家文書「御家中分限帳」に「物頭向坂善左衛門」、文久2年の福原家文書の「分限帳全」には「十人扶持向坂善左衛門」とある。当時、佐野藩は、戊辰戦争に際して、当初は出兵せず、官軍より不審のかどがあるとみなされた。そこで、佐野藩は官軍への服従の証明として郡奉行の向坂善左衛門を隊長として出兵し、三国峠の般若塚戦争を幕府軍と戦った⑭。前述の今井金平は、大筒奉行であった。

向坂 兌にとってみれば、姉の夫は幕軍に組して自害し、一方で、義父は官軍指揮官として勝利しており、いかなる思いで戊辰戦争を過ごしたのであろうか。

11 向坂兌養父母の墓

「法學狀師向坂兌之墓」の前に養父母の墓がある(図4)。「廉翁省齋居士 明治17年6月8日」その横に「定顔妙恵大姉」と刻まれている。その裏書きには、「君諱〇孝名卿之助長ジテ善左衛門と稱ス。向坂氏ハ下野ノ人ニシテ世ヲ堀田侯ニ仕フ。... 大橋氏... 天保六年承家〇〇侍十二年元服... 鐘猛麟刻」と書かれている。この養父母の墓碑は、被弾による損傷が著しく、一部しか判読できない。しかし、養父母のうち、養父・向坂弘孝は、兌死後3年後の明治17年6月8日に逝去し、その墓を養子・兌と同じ墓地に作らせた。養母・恵(えい)は、戒名のみ刻まれており、死去日は書かれていない(その後の調査



図5. 右：「勝沼精蔵ノ大叔叔父(杢子の弟)向坂兌ノ石(青山墓地ニアリ)」。(勝沼精蔵先生の自筆によるものと思われる。)

左：龍巖寺境内にある向坂 兌の顕償碑。空爆のため被弾している。題額は地中に埋まっていると思われる。

で、明治38年9月10日に館林で没している)。義父母の墓は養子兌を見守っており、向坂 兌の功績を讃える父親の愛情が読みとれよう。

なお、兌の死後は、弘孝の弟(歌之助、後に誠)の次男・武が継嗣した。現在、弘孝記録の「向坂系譜」その他の向坂家の文書は、誠の孫・誠一氏を経て、向坂 清氏(東京都在住)に引き継がれている。

12 再び「向坂兌君之碑」について

勝沼精蔵先生が所持していた「向坂兌君之碑」の写真について、もとの碑がどこにあるのかは、当初は不明であった。「向坂兌君之碑」の拓本の写真の裏には、青山墓地にあるというし(図5)、渋谷光雄氏は、横浜に建つと書いている。向坂家を継嗣した向坂 清氏、秋元会の小野田元一氏らも龍巖寺の石碑に着目した。その結果、被弾した向坂 兌の顕彰碑であることが判明した。碑は三つに折れ、最下部は台石とともに元の位置に、残りの二つはその後方にあり、刻文は組合わせると、ほぼ復元可能であった。しかし、題額のところはなく、おそらく地中に埋没していると思われる。今次大戦で渋谷区は12回の空爆を受け、龍巖寺付近は、昭和20年5月23日から3日間の空爆を受けている。向坂家の墓所の破損域は、5月25日の空爆によるとのことである。

「向坂兌君之碑」は、大学南校、南校、東京開成学校の同期生および同窓生によって建立されたことが判る。小野田元一氏の東京都赤坂区役所での調査で、明治14年10月、向坂弘孝の名前で、青山墓地に土地を求め、「兌君之碑」の建立願が碑文とともに穂積、杉浦、嶋山、小村ら45名の連名で提出されている(向坂君墓碑建立費寄進帳には「五十二名惣計百三十一円」と書かれている)。したがって、記念碑は、当初は青山墓地に、後に龍巖寺に移された。向坂系譜にも、兌は龍巖寺に葬り、記念碑は「青山共葬地第一等二十八ノ側へ建設ス」と書かれている。

杉浦重剛は、第2回文部留学生として向坂 兌とともに英国へ渡った同航者であり、明治13年に病を得て帰国し、3ヶ月静養の後、東大理学部に進学した。高橋健三は東京開成学校の同期生で、明治12年文部省に入り、14年には英国人フィリップス(Samuel March Philipps)著の「情供證據誤判録」(博聞社)を翻訳している。両名ともに26歳であり、向坂 兌の顕彰碑の建立に尽力したと思われる。当時、文部省の専門学務局長だった浜尾 新の題額をいただいた。浜尾 新は32歳であった。いずれも、その後の日本の中枢に入り、明治の日本精神を築き上げた人々である。「向坂兌君之碑」から、当時の明治の草創期の若者の息吹を感じとることができよう。

その後の杉浦重剛は、主として教育者として活躍し、「塾友たる者は知徳を淬礪し立身報国の墓を立つべし」という称好塾を開き、国学院学監などを勤めた。大正3年には、東宮御学問所御用掛りとなり、昭和天皇の皇太子時代に倫理学を進講し、「帝王の師」と称された。

高橋健三は、後に明治22年に官報局長、29年には内閣書記官長となり、官界の高士として知られた。

浜尾 新は、東京帝国大学総長を永年務め、帝国大学令を改正して講座制を導入し、今日の教授会自治方式を採用するなどの改革を行なった。文部大臣や枢密院議長も務めた。現在、東京大学校内にその銅像がある。

なお、英国に同航した入江陳重は、明治14年6月16日に横浜へ帰国した。向坂 兌の死後2日目のことである。その後、明治15年には、27歳で東京大学法学部教授となり、以後30年間教授として活躍した。日本の法律学の開



図6. 向坂 兌の写真。英国 ロンドン エリオット・フライ写真館にての撮影（上山城管理公社蔵）。



図7. 向坂 兌の写真(図6)の裏書き。エリオット・フライ写真館の刻名がある。勝沼精藏先生の直筆と思われる(上山城管理公社蔵)。

祖といわれている⑫。

岡村輝彦は、判事となり、入江とともに、英吉利法律学校設立に参画した。弁護士界の重鎮となり、大正2年から中央大学長となった。

時あたかも明治14年は、大隈重信が明治政府を免官となり、薩長政治が完成された年である。以後は、大隈の唱えた立憲政党政治が理念として掲げられた。「明治十四年」は、日本の近代国家形成の契機となった「政変」の年である⑬。

いずれにしても、向坂 兌は夭逝した。その同僚や同時期に彼と親交のあった友人は、明治14年頃に日本に帰国してパイオニアとなり、20～30年後には、その重鎮となって、日本の命運を担う人々となったのである。これを思う時、志を果せず、若くして他界した向坂 兌の無念の境地は、察して余りある。

13 向坂 兌の写真と精藏先生の嘆息

上山市教育委員会に寄贈された写真のなかに、背広姿で正装した向坂 兌の写真がある(図6)。写真の裏を読むと、それが英国ロンドンのポートマン・スクエア・ベーカー街55番地(55, Baker Street, Portman Square, London)のエリオット・フライ(Elliott & Fry)写真館で撮影されたことが判る(図7)。同写真館は現在は同住所になく、モートン街35番地(35, Morton Street)にある。同時代のベーカー街(Baker Street)はコナン・ドイル(Conan Doyle)の小説でシャーロック・ホームズ(Sherlock Holmes)の探偵事務所が存在した所で興味深い。向坂 兌の写真の裏書きには、さらに次のような闊達な筆で書かれた文章がある。

「大祖父向坂允(兌の誤り)氏ノ影ナリ。氏ハ幼ヨリ機敏ニシテ、明治初年に(明治三年の誤り)各藩秀才貢進生



図8. 文化勲章受章時の勝沼精藏先生。左下に勝沼精藏と直筆がある。名古屋、八勝館にて。

ヲ募ルニ当リ其ノ一人ニ加ハリ、大學ヲ卒業シテ西洋各国ニ留学ス。此影ハ氏ガ倫敦ニテ寫セシモノナリ。氏ハ法律家ナリシモ、氏ガオヲ奮ハントセシトキ即學成リテ帰朝シ横濱ニ帰ルヤ病魔ノ犯ス所トナリ、溘焉トシテ黄客ニ変シタリ。嗚呼良新(親の誤り)戚ヲ失ヒタル哉、林H・R」。この文章は、いかにも、その内容からみて勝沼精藏先生が書かれたように読み取れる。写真の人物は、精藏先生の祖母の弟の向坂 兌である。さらに、顕彰碑の写真の説明文に「勝沼精藏ノ大叔父(枳子の弟)。向坂 兌ノ石碑(青山墓地ニアリ)」と書かれており(図5)、その筆跡は、写真の裏書きのものと同一で、勝沼精藏先生が文化勲章受章時「八勝館」の砂利道で撮影された写真(図8)の横に書かれている氏名の直筆と同一である。ここでいう林H・Rは独語Herrの略と思われる。祖母・升も向坂 兌も、もとは五十嵐家から林家の養子となった。勝沼精藏先生は、それを思いおこして林H・Rと書かれたと思われる。

精藏先生の祖母・升は、若くして夫を、間もなく長男を失い、弟・向坂 兌の死も大変ショッキングな出来事であった。嫁も病弱のため、孫の精藏および六郎をしっかりと養育する責任があった。祖母の願いは、精藏もその弟六郎も大叔父のように国際的に活躍する立派な人物になってほしかったのであろう。大叔父の写真は、升から精藏に譲り渡されて、大切に保管され、それが勝沼先生によって裏書きされ、現在に伝わったものと思われる。

向坂 兌は英国留学へ出発するに当り、近親の子弟に「予帰朝の暁には、必ず高位高官に就くを以て、その際秘書官たるべく、それまで十分習字を勉強せよ」と告げたという^⑩。精藏先生にとっては、もしも、この大叔父がもっと長く生きてくれたら、大叔父の南校時代の友人のように、大叔父は、日本で最高の地位となったであろうし、何よりも、祖母も自分も、もっと苦勞の少ない生活ができたのではなかろうかと、勝沼精藏先生の嘆息するお姿を想像することができるのである。

結び

向坂 兌氏は、明治維新に活躍が期待された法曹界の研学である。夭逝のため、現在、その存在を知る人は少ない。著者らは、勝沼精藏先生の御遠祖を辿る中で、向坂 兌の存在を知り、龍巖寺境内に当時の活躍ぶりを刻した顕彰碑が存在することを知った^⑪。

一方、全く偶然にも向坂家の継嗣である向坂 清氏も、小学校時代の恩師藤間恭助先生とともに、向坂 兌の顕彰碑の拓本を行なって、先祖の歩まれた道を確認しようと努められた^⑫。向坂 清氏の家には向坂家の親族の系譜があり、今後、さらに明らかにされることが期待される^⑬。

明治14年12月に建立された杉浦重剛撰文「向坂兌君之碑」は、明治維新の進取の精神の気概を今に伝える貴重な碑文と思われる。現在戦火時による被弾により散逸している(図6)。このことについても、精藏先生は嘆息しているように思えてならない。今後 復元供養されることを切に望むものである。

なお、本稿を上梓するにあたり種々の御教示をいただいた香川大学法学部刑法教授の田中圭二先生、藤間恭助先生、向坂 清先生そして秋元会の小野田元一先生、松田仙三先生、さらに資料を提供して下された上山城芸芸員鈴木禎氏に厚く御礼を申し上げる。諸了沙土氏については名古屋大学環境医学研究所の岩瀬敏博士の解釈によった。

文 献

- 1) 塩澤全司, 高橋 昭(1992) 勝沼氏館跡と戒名のない墓碑。日本医事新報, 3560: 59-63。
- 2) 塩澤全司, 小野田元一, 高橋 昭(1996) 続 勝沼氏館跡と戒名のない墓碑(上)。日本医事新報, 3652: 63-65。
- 3) 塩澤全司, 小野田元一, 高橋 昭(1996) 続 勝沼氏館跡と戒名のない墓碑(下)。日本医事新報, 3653: 54-56。
- 4) 勝沼精藏(1955) 桂堂夜話。黎明書房, 名古屋。
- 5) 渋谷光雄(1927) 上山郷土史。p124, 上山。
- 6) 英國狀師故向坂兌君ノ略傳(1881) 明法志林, 14: 107-108。
- 7) 唐沢富太郎(1990) 著作集4 貢進生。幕末維新期のエリートたち。人生・運命・宗教。ぎょうせい, 東京。
- 8) 南校一覽(1872)。p29, (東京大学総合図書館蔵)。
- 9) 東京開成学校一覽(1875)。p48, (同上)。
- 10) 向坂 兌(1876) 刑罰論。講学余談, 2: 1-5。
- 11) 石附 実(1972) 近代日本の海外留学史。ミネルバ書房, 京都。
- 12) 穂積重行(1988) 明治-法学者の出発, 穂積陳重をめぐって。岩波書店, 東京。
- 13) Calls to the Bar. (1879) *The Law Journal*. 702: 410-411, (東京大学総合図書館蔵)。
- 14) 佐野市史, 通史編, 下巻(1979)。p65-70, 佐野市史編纂委員会, 佐野。
- 15) 姜 範錫(1991) 明治14年の政変, 一大隈重信一派が挑んだもの。朝日選書, 朝日新聞社, 東京。
- 16) 手塚 豊(1937) 夭折の英國狀師向坂兌氏のことも。法学会誌 明治大学学生法学会, 16: 92-95。
- 17) 小野田元一, 松田仙三, 塩澤全司(1994) 明治初期海外留学生 向坂兌墓地探訪記。秋元会, 館林。
- 18) 藤間恭助(1994) 拓本。悲運の明治初期海外留学生二人を偲ぶ。藤間恭助氏の御厚意による。
- 19) 小野田元一, 松田仙三(1994) 佐野藩向坂家目録。秋元会, 館林。

追 記

「講学余談」について

「講学余談」というのは、明治9年2月に第1号が、

4月に第2号が、東京開成学校に在籍した学生によって、自主的に作り出された雑誌である。「近代日本総合年表」(昭和43年刊、岩波書店)によると、本邦ではじめての学生自身が創り出した雑誌とされている。

「講学余談」の第1号の「緒言」には、「我輩課業ノ餘暇ヲ以テ私ニ一小會ヲ開キ各其從事スル所ノ學術上ニ就テ互ニ相益スル者ヲ演説討論シ筆記冊ヲ成ス然ルニ近來世上ニ流布スル雑誌ノ類多クハ時勢ノ論ニ涉リ學術ニ関スル者頗稀ナルヲ以テ今茲ニ此小冊子ヲ鑲行シ講學餘談ト名ケ以テ世ニ公ニス固ヨリ學術ノ宏遠ナルニ比スレバ豹文ノ一斑ナリト雖トモ少ク看官ニ裨益スル所アラバ幸甚、講學同志識、丙子二月」と書かれている。また、入江陳重の「遺文集」のなかにも、「講学余談」の発刊についての記述がある。「当時予は開成学校法律の第一学年科を了った計りの書生であったが、前年より杉浦、関谷等諸氏と謀って学問の研究旁弁論の演習の為の茶話会なるものを設け、当時始めて設けられた難段の化学教室を借受けて、殆ど毎週開会した。其会の講演を筆記したものが講学余談である。余談の講演は、当時世上では讒謗律を宛も秦の挾書律の如きものと思ひ、西洋の自由国には無い酷律の様に考へて居ったのに対して名誉保護律の趣旨を学問上から説かんとしたのであるが、今から顧みると乳臭書生の未熟な論文で冷汗がでる計りである。講学余談は明治9年余等洋行の後一旦廃刊したが、翌十年に至り、再び発刊したり。」

このように、「講学余談」は、学生のサークル的活動に支えられて自主的に発刊され、出版印刷人は入江陳成(重の誤り)、編輯人は同室の山本謙三となっている。第1号には、入江陳重が、「秦西讒謗律の解」という小論を載せており、そのほか、杉浦重剛は「飲酒の利害、付日本酒の酒精成分」を、岡谷清景は「橋梁の部、釣橋」を載せている。

「講学余談」の第2号には向坂 兌の「刑罰論」、久原躬弦の「烟芋毒ノ説」、そして著者不明の「理学ノ勸」が載せられている。向坂 兌は、この「刑罰論」のなかで、明治維新となり明治の新政府ができ、政府が政令を發布したり、政権を維持してゆくためには、刑罰を正確に定めることが今緊急に必要なにもかかわらず、それを周到に準備している人はいないようで、刑罰についての世人の論評は本質をついていない。刑罰の根本の原理から、刑罰権、その目的と方法、および刑量について、最善のものを緊急に定める必要がある。刑罰の大綱について、開成学校でのフランス法学士の講義から得た知識をもとに私見を述べている。

向坂 兌のこの論説については、弱冠24歳の学生の発言ではあるが、欧米の自由国の当時として斬新な知識に裏打ちされており、当時の世人や識者を大いに驚かせたであろうことが推測されよう。香川大学法学部の田中圭二刑法学担当教授も明治維新後における法体系の確立に際しての状況を知る貴重な資料であると述べている。

なお、ここでいうフランス法学士というのは、誰を指すのであろうか。開成学校では、イギリス法が主軸をなし、法学教育はグリグズビー(Grigsby W.E. 英国法律万

国公法教授(英国人))によって行われていた。一方、明治政府は、フランス型の司法制度を取り入れようとして、明治5年2月にパリ大学教授ブスケ(Georges Hilaire Bousquet)を来日させ、司法省直轄の明法寮を設け、法律専門学校を開設し、明治7年3月から授業を開始した。また、明治6年には、ボアソナード(Gustave Emil Boissonade)も来日し、民法典編纂の仕事に当たった。東京開成学校の法科の学生のなかには、新たにできた明法寮に転学したものもいたが、浜尾 新ら開成学校側は、新たに法学を専門にする予定もあるとのことで、転学を快く思わなかったようである。向坂 兌は、転学しなかったが、フランス法学に大いに興味を示しており、恐らく日本の最初の法律顧問ブスケまたはフランス法移入の父といわれたボアソナードの講義を受けたと思われる。ブスケは、明治9年に帰国した。向坂 兌は、明治14年にイギリスからフランスに留学先を変更した。フランスでブスケと向坂 兌は再会したのではなかろうか。

なお、「講学余談」は、入江、杉浦、向坂らの渡英後は廃刊となり、その後、明治10年6月から11年2月の間に再び刊行された。しかし、その論文の筆者名は書かれておらず、再版の緒言にも「大学ノ諸氏ニ諮ッテ編纂鑲行シ以テ世ニ公ニス」と書かれているように、大学側の介入があり、学生の自主的活動によった当初の発刊の趣旨とは、大いに異なるものとなった。このことは、入江や向坂らの素直な評論が、当時の政府に対する批判として映ったのではないかと推測されよう。

いずれにしても、「講学余談」の刑罰論は、夭逝した向坂 兌の法学に関しての数少ない遺稿の一つであり、当時の青年法学士の見解を反映した貴重な資料と思われる。

Abstract

President Seizo Katsunuma's lamentation for the death of "Barrister Naoshi Sakisaka" -His gravestone and Shigetake Sugiura's epitoph-

Zenji SHIOZAWA *
Akira TAKAHASHI **

Naoshi Sakisaka was born on April 27, 1853. His grandfather was the famous confucianist, Uetsu Igarashi. His sister Masu was the wife of Seinojo Katsunuma who died at the age of 35. Her grandsons, Seizo and Rokuro Katsunuma, were taken care of her.

Naoshi Sakisaka was adopted by the Sakisaka family of the Sano clan. In the 3rd year of Meiji, he was selected to be a student of Nanko in Tokyo. As he got good marks in school, he was recommended to go to England to study law. In London, he belonged to the Middle Temple and got a barrister license in 1878. Thereafter he worked in several places in Europe. As he had tuberculosis, he returned back to Japan and died on June 14, 1881. A tombstone was built in Aoyama and then moved to precincts of Ryugan temple. The inscription on the tombstone was produced by his friends of Nanko, Takezo Takahashi, Shigetake Sugiura, and Arata Hamao.

Seizo Katsunuma was born in 1886. Seizo graduated from Tokyo Imperial University and became Professor of Internal Medicine of Nagoya University School of Medicine, then he became President of Nagoya University. He won the Order of Culture prize in 1954. He died on Nov. 10, 1963. There were some articles left by Naoshi Sakisaka in Kaminoyama museum. Some letters written by Seizo Katsunuma were in the back of the portrait of Naoshi Sakisaka taken in London. If Naoshi Sakisaka had lived more, he would have gotten a high position in the center of Meiji government like his friends of Norishige Hozumi and Teruhiko Okamura, and Seizo's family would be more peaceful than it was.

President Seizo Katsunuma loved to talk about his great relative, Naoshi Sakisaka.

Key words: Barrister, President Seizo Katsunuma, Naoshi Sakisaka, Gravestone, Ryugan temple.

* Department of Neurology, Yamanashi Medical University

** Emeritus Professor, Nagoya University